ゲルニカ空爆をテーマに描いたピカソの代表作「ゲルニカ」

藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

ゲルニカ空爆

スペイン北部、バスクの聖地ゲルニカが、ナチス・ドイツ軍の無差別爆撃を受けた。一九三七年四月二十六日。市民二千人以上が亡くなった。

四月二十六日付の読売新聞に長崎の新市長が「被爆地の我々も爆撃の悲惨さを身をもって理解している」というメッセージをゲルニカ市に送った話が出ていた。

ゲルニカは人口わずか七千人余りの小さな街だが、バスク地方の「自由と独立」の象徴の聖地である。

当時、スペインは共和国政府とフランコ将軍率いるファシスト軍との間で内戦状態にあった。

ナチス・ドイツ軍はフランコ支援と引き替えに物資を要求。スペイン北部の鉱工業などの拠点、ヒルバオと自由に往来できるように途中にあって邪魔なゲルニカをフランコ将軍の暗黙の了解のもと爆撃したのである。

ピカソは当時、パリに在住していたが、このドイツ軍の無差別空爆に激怒し、パリ万国博、スペイン館に展示する「ゲルニカ」を一気に描きあげた。

「絵は部屋を飾るために描かれたのではない。絵とは闇と野ばんに立ち向かう戦闘の道具だ」と言っているように「ゲルニカ」は単なる絵画ではなく、活動的な役割を持った作品である。

幅七・七五トルもある大作「ゲルニカ」はフランコ・ファシズム反対の象徴的な存在となり、パリ万国博が終わってもスペインには返還されず、長くニューヨークの近代美術館に展示されていた。

一九七五年、フランコ将軍の死去でやっとスペインに返還され、今はマドリッドの国立ソフィア王妃芸術センターに展示されている。

訪れた時、小学生の団体が作品の前にずらりと座り、先生の話を聴いていた。

その小学生の姿が広島の原爆資料館で話を聴く日本の子どもたちの姿とオーバーラップした。

「ゲルニカ」は強い反戦メッセージを持っている。

ゲルニカ空爆は、人類史上初めての無差別じゅうたん爆撃として国際世論から非難された。

しかし、それから八年後、今度は人類史上初の原子爆弾が広島に投下された。さらに長崎にも。

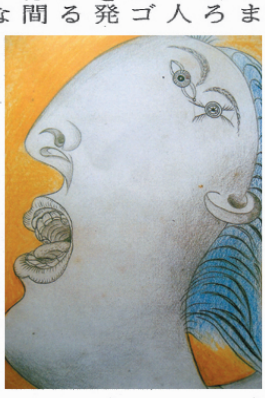
人間はなぜこのような愚かな行為を繰り返すのだろうか。二十一世紀になっても、各地で紛争があとを絶たない。

戦争とか、紛争といえばひとごとに思えるが、つまるところ個人・人間のエゴに端を発していることは間違いない。「ゲルニカ」の展示場所にも、権力者のエゴを感じる。

ピカソの制作意図、描かれている弱者、また六十三歳でフランス共産党に入党したことなどを考えると「ソフィア王妃」という冠がつく美術館に展示されているのはふさわしくないように思える。

世界三大美術館の一つ、マドリッドのプラド美術館になぜ展示しないのだろうかと思った。駆け足の旅で一カ所で二つの美術館に行くのは大変だという本音もあるのだが…。

（元山口放送取締役ラジオ局長）



「ゲルニカ」完成までにたくさん描いた習作の一つ